死神と呼ばれて

S割

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神と呼ばれて

【Ｎコード】
Ｎ１７２２Ｂ

【作者名】
Ｓ割

【あらすじ】
死を迎えようとしている人間の前に現れ、その死を見届けるのが私の勤め。死を前にした人間が作り出す物語。そんな話。

死神と人間（前書き）

初めて小説みたいなものを書きます。勘弁してください。

死神と人間

もうすぐ死に逝く者の前に現れ、死後その魂を『向こう』へ連れて行く。それが私たちの勤め。

仕事柄、死神だとか何だとか言われることもあるが、そもそも私たちに呼称は無い。そんなものをつける必要なければ意味も無い。

死神と呼ばれてもかまわないが、私は何もしない。死ぬのは人間の勝手だ。それなのに私たちを恐れる意味がわからない。

日々の生活の中、命に限りがあることを考える者は少ない。死というものを意識の奥底に沈め、その他どうでもいいことに悩み、苦しむ。それなのに私たちが現れると、途端に死を意識し、恐れ、死を目の前にして初めて今までの悩みや苦しみがいかにくだらないことかを理解する。

なぜ？死はいつも身近に在るのに、それが目に見えるカタチにならなければ考えられないのか。理解できない。ただ死ぬことの無い私には理解できないだけなのか。知らないが。

人間は不可思議な生き物。

それだけは理解できる。

老婆と死神（前書き）

しょっぱなから長くなってしまいました。勘弁してください。

老婆と死神

事故だの自殺だの病気だの、毎日どこかで人が死ぬ。
どこで誰が死のうが勝手だが、私たちの仕事が増えるのは困る。特に最近は先に上げた死が多い。人にはちゃんと寿命が用意されているというのに。まぁ、知ったことではないが。
しかし、今回迎えにいく人間はそんな天寿を全うして逝く者だ。
８０歳の老婆。今ではこれくらい普通だろうが、大昔にしたら大往生。これだけ生きた老人ならギャアギャア喚かないからいい。人間は死ぬとわかった途端に喚き出す。そんなに死ぬのが嫌なら何故生きている間に命を削るような事ばかりしているのか。理解に苦しむ。
まぁ、死の無い私がそれを理解出来るかは知らないが。

Ｃａｓｅ．１片山　トミ子。
８０歳。
数日以内に死去。

主人に先立たれてもう１０年。息子二人も家庭を持ち、今ではこの家に一人。唯一の楽しみは年に数回しか来ない孫の顔を見ることくらい。
「ふぅ…」
沈む気持ちをお茶と一緒に流し込む。ふと、何の気なしに外を見る。
「片山　トミ子。」
庭に男が一人立っている。急に名前を呼ばれ心臓が止まりかけた。
「誰！？」

最近年寄りの一人暮しがよく狙われている。だとしたらこれはマズイんじゃないかしら。
「と、盗る物なんて何もないわよ！？け、警察！警察呼ぶからね！」
「迎えにきた。」
わたしがすごい剣幕で叫んでいるのに、男は表情一つ変えずに一言そう呟いた。
「な、何わけのわからないこと言ってるの！？か…はぁ…か、帰って、ち、ちょうだい！はぁ…」
「おたくは数日以内に死ぬ。」
「はぁ…はぁ…何を……言って……はぁ…」
急に大きな声を出してしまったから胸が苦しい。頭がクラクラする。歳はとりたくないわね…
「死に急ぐのは勝手だが、少し落ち着け。」
淡々と話す若者は、やはり表情を変えず立っている。まるで生きている人を見ている気がしない。それどころかそこに立っている気すらしない。
「あなた何者？」
まだ荒い呼吸を落ち着かせながら男にたずねる。
「おたくの魂を運んでいく。そういう存在。」
「は？」
少し後ずさるわたしを見ながら若者は淡々と続けた。
「おたくは数日以内に死ぬ。それまで私は何もしない。」
「は？」
いまいち理解できないわたしを見て、面倒なのかため息をひとつついてから、若者は説明してくれた。
どうやらわたしはもうすぐ死ぬみたい。はいそうですかと信じられるわけないけれど、どうしてか信じられないわけでもない。
「で、わたしはどれくらいで死ぬの？」
「教えないことにしている。」
「どうして？知りたいじゃない。」

「知ったところで何も変わらない。だから教えない。」
「ケチねぇ。」
答える気はないみたい。それにしても、家に上げて居間に通しても何で立ったままなのかしら。
「ねえ、座ったら？」
「必要無い。」
「気になるのよ。それとも一つ聞いていい？」
「かまわない。」
「わたしが連れていかれるの所はどんなとこ？やっぱり天国かしら？」
「そんなものはない。」
「じゃあどんな所？」
「何も無い。ただ魂だけが在る所。」
てっきり天国にでも連れて行ってもらえると思っていたのに、なんだか拍子抜けだけど。まあいいわ。
「これから買い物に行くんだけど、付いて来てくれない？」
「なぜ？」」
「夕飯の材料、二人分だから重いのよ。」
「私は何も食べなくても問題無い。」
「そんなこと言わないで、ほら。」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

この老婆の所へ来て数日。毎日私のぶんまで食事を作る。必要無いと言ったはずだが。理解に苦しむ。
いつも思う。人間は不思議な生き物だ。姿形は私と全くと同じなの

に。そもそも永遠に終わりの無い私では理解できないだけなのか。
知らないが。
「今日くらい座って一緒に御飯を食べましょうよ。」
「必要無い。」
「そんなこと言わないで、ほら。」
この数日、毎日この繰り返しだ。まぁ、今日くらいは聞き入れよう。
これがこの老婆の最後の晩餐だ。
「あら、どういう風の吹きまわし？」
席につくなり老婆は明るい表情でそうたずねてきた。
「別に。」
意味は無い。ただの気まぐれ。それだけ。
それから机の上に並べられた物を満遍なく食べさせられ、必要以上に食べるはめになった。
「おたくは家族に知らせないのか？死ぬこと。」
「ええ、変な心配かけたくないから。」
「そうか。」

食事も終わり、もう老婆の睡眠の時間になった。
この老婆は毎日8時過ぎには眠る。早い。眠る必要の無い私も思う。早すぎる。
老婆が眠れば向こうへ連れていくことになる。そう思い寝室を覗いてみる。すると老婆は枕もとに座り、一枚の手紙をじっと眺めていた。
「それは？大切な物なら一緒に向こうへ連れて行くことも出来るが。」
「そんなこと出来るの？」
「可能だ。」
「そうなの。でもいいわ。これを書いた人はきっと向こうにいるから」
まぁ、いるだろう。

手紙を見るにずいぶんと古い物のようだ。
「ずっと昔にもらった物なの。戦争中にね…」
そういうと老婆は過去を語りだした。手紙の向こうに何かが見えているのだろうか。そんな目をしながら。

老婆と手紙（前書き）

前回よりは短くまとめられたと思います。

老婆と手紙

僕があなたのためにしてあげられることは何かあるかな？
あったら何でも言ってほしい。でも、できれば今日一日で済む事の方がいい…明日にはもう僕はいない。

あの人は家にやってくるなり、突然そんな事を聞いてきたんだよ。
何を言っているの？どういうこと？って彼を問い質したけど、もうだいたい気付いてたよ。
特効が決まったって、だから基地を抜け出し合いに来たって…あの人の口からそれを聞いたとき、本当に何も見えなくなるくらいに涙が溢れて、私はその場で崩れ落ちてしまった。
お願いなんて一つだけ。ずっと私のそばにいてください。
私が泣きながら、嗚咽で殆ど聞き取れないような声でそう叫んでも、あの人はただ悲しそうに笑みを浮かべるだけだった。
私だってわかってたよ、それはもう叶わぬ願だと。それでも、私はあの人に縋り付いてそう喚く事しか出来なかった。

すまない。やはり会いに来るべきではなかった。君を悲しませただけだった。
何より、覚悟が一瞬揺らいだ。
だから僕はもう行くよ。この手紙…ここに置いておく、読んでくれ…
…行ってまいります。

敬礼をしたあの人の姿は今も夢に見る。

そして踵をかえすと、振り向くことなくあの人は行ってしまった。
その時渡されたのがこの手紙だよ…
それからひと月も経たないうちに戦争は終わり、日本は敗戦した。
でも、そんな事はどうでもよかった、国が負けたことなんかより、
たった一人、あの人がいなくなった、それだけでもう生きている意
味なんてなかった…
そんな時ずっと懐に入れたままだったこの手紙の事を思い出してね。
読まなきゃって思って、封筒から便箋を取り出して、それを読んだ
後の事はあまり覚えてないよ。
それくらい泣いたからね…

拝啓―トミ子殿

この手紙を書くにあたり、貴女に謝らなければなりません。私は今
まで貴女を悲しませ続けてきました。そして今、貴女の触れられぬ
所へ行こうとしています。貴女ひとりを幸せに出来ないこの甲斐性
なしをお許し下さい。
でも私はあの日決めたのです。
覚えていますか？私の元に徴収礼状がきたあの日。名誉な事だと万
歳三唱で送り出してくれた私の両親とは反対に、貴女はひとり泣い
てくれました。
覚えていますか？あの日の夜の星空を。私が出兵する前の夜。貴女
は私を連れ出して、小高い丘の上に連れてきました。二人で星を見
ていると貴女はこんな事を言いましたね。
まるで月が泣いているよう。この国や、遠い異国で祖国を思い死ん
でいった人たちが流した涙が月の周りで煌めいているようだと。
私はあの夜決めたのです。
ならば今生きている者達の、せめて貴女の幸せは守って見せると。

しかしそんな事も出来ぬまま、私の特効が決まりました。貴女はまた悲しみ泣いているのでしょう。
私はこれから散る桜。ならばせめて満開に咲き誇り散りましょう。
私のこの命で、この国に住む人の、あの夜空の星の数ほどの輝ける未来が守れるのなら、死すら喜んで受け入れましょう。
ただ一つ、貴女の事だけが気掛かりです。
貴女ほどの器量なら貴女を幸せにできる男をすぐに見つけられるでしょう。私を忘れなさい。そしてその男と幸せになりなさい。
私はあの月の周りで燦然と輝く星になり、この大地に、貴女に、光りを降り注ぎます。貴女の幸せを祈り、見守ります。
貴女に残すべき言葉はいくら書こうと書ききれません。
貴女に伝えたい言葉はこの筆だけでは足りないようです。
貴女の幸せだけをただ切に祈り、ここで筆を終わらせてもらいます。

私の最後の言葉をこの手紙に添えて―さようなら―

老婆と化粧（前書き）

やっぱり長くなってしまいました。勘弁してください。

老婆と化粧

「まぁ…この話はここで終わりだけどね。」
「そうか。」
老婆は少しだけ瞳にたまった涙をこぼれる前に拭った。
「涸れるほど泣いたと思っても、涙は出てくるもんだね。」
鼻を啜りながら老婆は笑う。
「生きていれば涙が涸れることはない。」
生理現象。あたりまえのことだ。
「そうね。でも…じゃあこうやって昔話に涙できるのも後少ししかないのね。」
老婆の表情は笑顔だがそれが本心でない事は私にでもわかる。
「向こうでも変わらない。」
「え？」
「肉体が消えても魂は消えない。」
「そうなの…」
「あぁ、そうさ。」
「ありがとうね。」
慰めたつもりはない。ただ事実を言っただけだったがこの老婆にはそれが救いだったようだ。
「向こうでアタシはどれくらいいられるの？」
「終わるまで。」
「なにが？」
「知らない。」
「あら…そう。」
何かが終わるまで。そう伝えようとしたところで、ふと疑問が浮かんできた。
「幸せな人生だったのか？」

聞いたところで私に何か有意義な事があるわけではないが、ただ聞いてみたかった。
「どうして？」
「死んだ後の事ばかりきく。」
「そうねぇ…」
少しだけ考える間を空けた老婆だったが、この問いに他に答がないかのようにはっきりと答えた。
「私にはもったいない人生だったわ。」
どうやら今度の笑顔に嘘はないようだ。
それから老婆はこれまでの人生を振り返り始めた。

あの手紙を読んでから、私はずっと泣き続けたわ。
だってそうでしょ？今思えばひどい話よ。
あんな手紙を残されて、それで自分の事は忘れて新しい人生をだなんてあんまりでしょ？忘れられるわけないじゃない。
それからはずっと悲しみの中日々明け暮れていたの。
でもある日。夜道を歩いていたときにふと思い出したの。復興の道を行く生活の中、疲れと悲しみでずっと足元ばかり見ていたから気がつかなかった。夜空の星を。
ああ、このままじゃいけないんだって。あの人はあんなにも私の幸せを思ってくれていたのに、今の私じゃあの人に申し訳ないって。
それから少ししておとうさんに…私の旦那様に出会ったの。
優しい人だった、結婚するまでそんなに時間はかからなかった。
それから二人の子宝にも恵まれた。おとうさんったら一人目が生まれた時の変わりようはすごかったのよ。酒もタバコも、女は元々しない人だったけど、全部の遊びをやめて子供にべったりで。
思春期は大変だった。兄弟喧嘩におとうさんが割って入って、そのまま三人で取っ組み合いになんてしょっちゅう。障子や窓ガラスを張り替えない月なんてなかったの。

そんな二人も大人になってこの家から巣立って行った日。こっそり泣いていたのもおとうさん。
二人の結婚式で、声を大にして泣いていたのもおとうさん。
そんな人と過ごしたこの人生が幸せでなかったはずがない。

そう言い終わると、老婆は口を閉じた。私もとりわけ話す理由もなかったのでその沈黙をまもった。
「昔より狭くなった空に星がでると、今では二人の事を思い出すの。あの人と、おとうさんの事を。」
「そうか…。」
人はみな思い出と思い出の積み重ねで生きていく生き物で、その思い出の一つ一つが人の幸せを作っていく、と、昔誰かからきいたが、忘れた。
ただ確かにこの老婆においてはそういうことなのだろう。
「神様に感謝しなきゃいけないね。」
「その必要はない。」
「どうして？」
「あいつは何もしない。」
「知っているの？」
「私の上司だ。」
「あら、まぁ。」
何が可笑しいのか、老婆は腹を抱え笑い出した。わけがわからず怪訝な顔をしている私を見ると、またさらに吹き出していた。
「ああ、可笑しい。」
「なにが？」
「ふふ、別になんでも。」
そう無邪気に笑う老婆はまるで昔に戻っているように見えた。
「ふぅ、さてそろそろ寝ようかね。もうこんな時間だ。」

時計はまだ１０時を過ぎたばかり。
「やはり老婆は老婆。」
私が小声でそう呟いていると、なぜか老婆は立ち上がり化粧台の方へ歩いて行った。
「寝るんじゃないのか？」
「その前にお化粧しておくのよ。いつ向こうに行ってもいいようにね。」
「なぜ？」
「みっともない顔で行きたくはないもの。」
そう言うと老婆は鏡に向い化粧をし始めた。
「あまり綺麗にしていくと向こうに行ったときに大変だ。」
「どうして？」
鏡越しに顔を白く塗った老婆が訪ねてきた。
「手紙の男と旦那のあんたの取り合いが激化する。」
「ふふっ、そうね。」
そう微笑みながら振り返った老婆の顔が、化粧のせいか知らないが、一瞬若い美しい女に見えたのは刹那に見た幻か。化粧も終わり立ち上がった姿はやはり老婆だった。

「それじゃあおやすみ。」

老婆は眠りにつき、
そして、
次の朝、目覚めることはなかった。

老婆の寝顔はこれまでの人生そのもののようだ。

さあ逝こうか。あんたの魂も、その積み重ねた思い出も、責任持って送り届けるよ。

不良と死神

「神崎　隼人。」

「うお！？何だテメェ！？」

部屋でテレビを見てたら急に後ろから声がして、振り返ってみたらいきなり男が立っていやがった。

「迎えにきた。」

「はぁ！？何言ってやがる！ってかどっから入って来やがった！？」

なんだ？こいつ。わけわかんねぇ。頭おかしいんじゃねぇか？

「おまえは数日以内に死ぬ。」

「ハッ！イカれてんのかテメェ？ってか質問に答ろや！」

「それまでおまえにつきそい、死後、おまえの魂を向こうに連れて行かせてもらう。」

「シカトかテメェ！殺すぞ！」

こいつ、絶対やべぇ。何かヤバイもんでもキメてんじゃね？

「喚くな。耳に障る。」

「ハッ！言うねぇ。」

バタンッ！！

立ち上がろうとしたら勢いよく部屋のドアが開いた。お袋か。いきなり開けんじゃねえよ。

「うるさい！何近所迷惑な声出してんの！一人でぎゃあぎゃあ騒ぐな！」

「テメェのがうるせえよ！それに一人でじゃねぇ！テメェの横のやつに言ってんだよ！」

眉間にシワを寄せ隣を見るお袋。そのまま黙り込んだ。

「あんた…何言ってんの？」

「は！？」

じっと隣を見続けているお袋が、横目で俺に聞いて来る。

「何にもいないじゃない。あんた大丈夫？」

「はぁ！？」

何言ってんだ？いるじゃねえか！そこに！テメェの目の前に！！

「私はお前の他の誰にも見ることは出来ない。」

「なっ…」

んなわけねえだろうが！いや、でもお袋には…

「ねぇ…あんたほんとに大丈夫？」

「うるせぇ！いいからテメェはさっさと出てけ！」

お袋を部屋の外に追い出すと、しまったドアを見つめ、ただ呆然と立ちすくむしかなかった。

「テメェ、一体何もんだ？」

「おまえの魂を運んでいく。そういう存在。」

「ハッ！何だそりゃあ…」

何だってんだよ。いったい何がどうなってやがる。

Ｃａｓｅ．２神崎　隼人
１９歳
数日以内に死去

うるさい。どうして若い人間はこうも喚くのか。私のことが理解できないから恐いのか。知らないが。とにかく、ようやく落ち着いてきたようなので話を進めよう。

「とにかく、お前は数日以内に死ぬ。それだけ。」

「んなこと、信じられると思うのかよ。」

「無理に信じようとする必要は無い。」

信じようが信じまいが、必ず死はやってくる。いちいち喚かれるのも迷惑だが、信じたくなかったらそれでいい。

「なんだそりゃ…。まぁ、テメェが人間じゃねえのはわかった。なんだ？魂を運ぶ？あれか。死神ってやつか？」

またそれか。私の何をどう見てそう思うのか。ときどき人間の創造力には感服する。

「何と呼ぼうがかまわない。私に呼称はない。」

それとも、ただ私に呼称をつけたいだけなのか。知らないが。

「ハッ！それじゃあ死神よぉ。聞きてぇことあんだけど。」

「伺がおう。」

「俺があと少しで死ぬっていうけどよ、んなもん証拠でもあんのかよ？」

「そんなものがなければ理解できないのか？」

「んだとテメェ！！」

また、始まった。何なんだいったい？面倒臭い生き物だ。

「信じたくなければそれでいいと言っている。ただ、理解しろ。それだけ。」

「何言ってんだテメェは！？理解しろだぁ？意味わかんねえよ！ってかさっきから何そこに突っ立って人のこと見下ろしてくれてんだよ！ウザいんんだよ！」

何だそれは？そんなどうでもいいことにいちいち喚き散らすのか？理解できない。

若い人間の、とりわけこの手の種類は、どうでもいいことによく吠える。何を恐れてそんなによく吠えるのか。知らないが。

まぁ、あと数日過ぎればこの勤めも終わる。面倒だが、それもすぐ終わる。それまでこの人間を少し観察してみようか。何かを理解できるかもしれない。

まぁ、それが私にとって、有意義かどうか。知らないが。

不良と夜

くそ！わけがわかんねえ！俺が死ぬって？んなわくねえだろ！
昔は身体が弱かったけど、今はそうじゃない。最近じゃ病気らしい病気はしたことがねえ。今少し風邪気味なくらいだ。それなのにこの死神野郎は。マジでウゼェ！

「クソッ！」

タバコを探していたら、携帯の着信音が響いた。

「なんだよ？」

電話の相手はいつも夜の街でつるんでるツレだ。

『おう。暇くね？今から出てこいよ！』

「暇。ちょっと待っとけよ。すぐ行く。」

たぶんいつものファミレスにいけばいるだろ。
場所も聞かず通話を切る。いろいろうっとうしい気分もツレと話してりゃはれるだろ。死神に目をやるとただこちらを見ているだけ。
立ったまま壁にもたれ、仕草も表情も変えずに俺を見ているだけだ。
ウゼェ。その目がウゼェって言ってんだよ！

「外出か？」

「うるせえよ。テメェにゃ関係ねえだろうが！」

上着を羽織り部屋を出る。階段を降りればすぐに玄関だ。
死神がついてくる気配は無い。まあついてこられてもウゼェだけだけど。玄関のドアに手を掛けようとしたら、急にお袋の声がした。

「またこんな時間に…あんたいい加減にしときなさいよ？」

振り返ると寝巻姿のお袋が立っていた。

「明日も仕入れがあるから朝早いんだから。もう鍵締めちゃうわよ？」

「締めりゃあいいじゃねえか！ほっとけや！」

「あんたねえ…高校でてから仕事もバイトもしてないんだから、いい加減うちの仕事も手伝いなさいよ。」

「うるせえ！花屋の仕事なんてだれがやるかよ！」

家を飛び出し単車のエンジンに火をつける。
とっととツレのところに行っちまおう。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「おっせぇよ。トロトロと走ってくんなや！」

ファミレスに入ってきた俺を見つけると、電話をかけてきた本人、

隆二が俺を見るなり言ってきた。

「うるせえよ。とばすと寒くて死にそうになんだよ。」

今は冬。へたにスピードを上げると凍えそうになる。

「こっちは死ぬほど残業やってきて疲れてんだよ！待たせんな、プー太郎が！」

「いちいち勘に触ること言いやがるな。やんの？」

隆二と俺とで険悪な雰囲気になったところで、隆二の向かいに座ってるやつが割ってきた。

「お前ら二人ともうるさい。」

「お、昭人もいるんか。気ずかんかったわ。」

そう言うと、昭人は

「あ、そう」

と自分の前に置かれているコーヒーに手をやった。

隆二と昭人は同じ工場で働いている。毎日残業ばっかでウザったいと、いつも隆二が愚痴っているのを聞いている。

「オメェはいいよな。毎日ゴロゴロしやがって。ニート野郎が！それにいざとなったら家の仕事を手伝えばいいだけなんだからよ。」

「うるせえな。花屋なんてやらねえよ。」

「じゃあプラプラしてんじゃねえよ。バカウゼェ。」

仕事場で何かあったのか？今日は隆二がやけに喧嘩を売ってきやがる。昭人は、我関せずでシカト決め込んでやがるし。せっかく気晴らしに来たのに、意味ねえじゃねえか！クソッたれ！

「クソッ。ウザってえッ！ゴホッ！ゴッ！ゲボッ！」

悪態をはこうと思ったら咳がそれを邪魔した。最近風邪気味みたいで咳がよくでる。

しかし、口をおさえた手に違和感がした。そして、手のひらを見て絶句した。

「どうしたよ？いきなり咳だしたと思ったら急に固まって。今日食った晩飯でも出てきたかよ？」

じっと手のひらを見つめ固まっている俺を見て、怪訝そうな顔で隆二がそう聞いてきた。昭人も心配そうな顔でこちらを見ている。

「いや、何でもねぇ…」

なんでもない。ってゆうか何だこれ？意味わかんねえよ。いや、マジで、どうなってやがる。

手のひらについた血糊を見ながら混乱していると、今度はめまいまでしてきやがった。

「ッ！まじかよ…」

ブラックアウトする意識に崩れ落ちていく途中、あの死神やろうの顔が頭を過ぎった。

こんなのが最期かよ。そう思うと、底知れぬ恐怖が込み上げて来て、
床に突っ伏したまま涙が流れ出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1722b/

死神と呼ばれて

2011年1月26日03時27分発行